

博物館の運営について

Managements of Museum

内 海 量 夫[※]

Kazuo Utsumi

北海道青少年科学館連絡協議会と全日本博物館学会の共催による職員研修会のテーマが“科学館運営の諸問題と解決策について”であった。

この科学館運営上の問題について、討論の内容を整理してみると、一番問題となって残ったのは、予算と人手の問題であった。もちろん予算が足りないから仕事が出来ないというのも困るが、このために各館がいかに苦勞しているか、これは私も日頃苦しんでいることであり、したがってこれに対する解決策はと大上段に振りかぶったところで、別にいっぺんにきく特効薬的な案もないが、私なりに考えていることを述べて見たい。

これは容易なことではないとよくわかっているが、私はそう悲観もしていない。なぜならば日本人のバイタリティを信じているからである。

実例として、終戦後あの荒廃した日本の経済は30年で今日のこの隆盛ぶり。日本人は良いなと思ったら恐るべきスピードで進み出す民族である。学校教育は必要なものだ、自分の子供の将来のためになると思うと、猫も杓子も大学、大学で、明治37年に5000人だった学士様が、昭和50年には200万人(400倍)を突破、人口はこの間に2倍半より増えていない。

私は、種々の職場を経験し教育の世界に中途から入ったのでつくづく感ずるのは、博物館の世界ほど平均的にハイ・レベルの人材が揃い、また実に熱心で立派な方々の多い社会はないと思う反面、これほど有意義な内容を世間にうったえ方の下手な社会もないと思うのである。

社会教育施設である博物館は、原則として、求めるすべての市民に公開され教育活動は多様な市民要求に対処しなければならない。研究活動の充実、その成果を教育活動によって押し進め、この二本の柱の高揚こそ博物館発展の道であることに異論はない。

しかし昔、象牙の塔という言葉は研究と教育のみで、世間の情勢にうとい大学に使われた言葉であるが、昨年室蘭工業大学学長就任あいさつの第一声は、市民との交

流、大学の公開であり、事実最近公開大学講座も開かれて、大変な前人気で、大学も自分達の研究成果を広く市民に理解してもらおうべく努力しはじめている。

博物館の教育活動の対象として芹沢は(「自然史系中小博物館学における教育活動の構成」博物館学雑誌1巻2号)4つに分けている。

1. 何とはなしに関心をもっている 関心レベル
2. ある知識を得たい 勉強レベル
3. 自分で何か研究してみたい 研究レベル
4. 専門の研究者及びこれを目指す人 専門レベル

私は、これに無関心レベルを加えてみたい。なぜならば、この様に分けた場合無関心レベルの人数が絶対多数になるのではないか。行政サイドから見て予算の配分また位置づけに、これでは首をひねるのがあたりまえであろう。また現状で人員増を要求しても、満足するだけの専門職員の配置を得ることもむずかしいと思う。これに対処するためにも博物館に対する関心層を広く開拓し、この中より多くの協力者を獲得するのが、問題解決の近道ではないか。また個人だけではなく、最近の企業が文化的活動に大きく目覚めつつあるのも非常にうれしいことである。最近、ある本を読んで面白いと思ったのは、住宅の未来像はと聞かれたフランスの建築家ル・コルビュジェは、「住むための機械となる」と答え、シュルリアリズムの代表的画家サルヴァドル・ダリは何と答えたかという、「だんだん毛深くなる」と答えた。

私は初めわからなかったが、よく考えてみるとどちらの答も正しいが、どちらがより多く未来をとらえているかというと当然後者だと思う。前に述べたごとく、猛烈型日本人及び企業は、終戦後の、作れば売れる時代、大量生産販売時代、効率確保時代、高品質確保時代を経て、現在の企業は存在意義の時代、つまり人間の物心両面の生活を無視した、物質的貢献のみでは企業の存在そのものがスボイルされようとしていることに気がつきはじめている。

企業イメージを感じさせ、理解させ、その上に立って好意を定着させる。このためには企業は社会に対して物質的貢献だけにとどまらず、文化的にも貢献しなければならない。その文化的還元が本物かニセモノかの判定は、企業経営者の社会的良心と受ける市民の正しい判断能力にかかっている。このために博物館を仲立とし市民と語り合うのが最も価値あるということを、市民と企業に理解させた時、組織的な大きな協力が得られるのではないか。外国の博物館は、このような企業と社会の協力が重要な原動力となっているのではないか。

私はいつでも思っていることであるが、博物館というと、中央館も地方館も、大型館も零細館も規模がちがうだけで同じことをしては、どうにもならないのではないか。道内の科学館は小規模であるが、小規模なだけ

に大きな利点は多くの市民に肌を接してうったえ得る場であることを活用し、企業の職員に負けない電話の応待の改善、接客技術とセンスの向上、つまり親方日の丸的な悪い意味のお役所意識の解消、このような身近かな日常の些細なことの改善の積み重ねで善意の協力者の輪を大きく広げて行くことこそが、問題解決の方法ではないか。

地方博物館が高邁な理念の上に立つことは良いことではあるが、伝統の消極的な象牙の塔に立こもって、日進月歩の発展社会に立遅れた古い道を辿っているのは、これからの博物館とはいえないと思うのである。

(うつみ かずを 室蘭市青少年科学館)
※Muroran City Youth Science Centre